

# 須田国太郎資料 島田康寛編

## 略年譜

一八九一年  
(明治二四)  
京都市中京区に長浜縮緬を商う金大の須田彦太郎、フジの末子として生まれる。兄彦蔵(一八八二生)、姉とき(一八八五生)。

一九一〇年  
(明治四三)  
第三高等学校に入学、独学で油絵を始める。金剛流高岡鶴三郎に師事し謡曲を習い始める(一八九七)。

一九一三年  
(大正二)  
父彦太郎歿。第三高等学校卒業。京都帝国大学文科大学入学。深田康算のもとで美学・美術史を学ぶ。

一九一六年  
(大正五)  
京都帝国大学哲学科(美学美術史専攻)卒業。卒業論文「写実主義」(「写実主義之意義とその可能」「芸術に於ける真の問題」の二部構成)。大学院に進み、「絵画の理論と技巧」を研究テーマとする。母フジ歿。

一九一七年  
(大正六)  
奈良浅茅ヶ原にしばしば滞在し、奈良帝室博物館や寺院に通って写生に励む。ドイツ文学講師ヘルフリッチに独学を諫められ、関西美術院に入り、都島英喜、沢部清五郎にデザインを学ぶ。午前はデッサン、午後は読書、夜はフランス語などの語学の勉強に通う。

一九一八年  
(大正七)  
大学院を中退。

一九一九年  
(大正八)  
渡欧。ロンドン、パリを経て、マドリッドに滞在。

一九二三年  
(大正一二)  
帰国。外遊中に、関野貞、児島虎次郎、中沢弘光、黒田重太郎、川端弥之助、里見勝蔵、川口軌外、山内得立、園頼三らと交流。京都帝国大学美学会が設立され参加する。

一九二五年  
(大正一四)  
和歌山高等商学校講師(一八九三三)。松居絹子と結婚し、北区出雲路松ノ下町に新居を構える。川端弥之助の聖護院のアトリエで裸婦像を制作(一八九二六)。

一九二八年  
(昭和三)  
関西美術会展に《丘上の村(モヘンテ)》を出品。この前後、しばしば奈良や山陰に写生旅行をする傍ら、毎年出品する。深田康算の死に遭い、その肖像を描くことを申し出、翌年から制作。以後、意欲的な制作活動に入る。

一九二九年  
(昭和四)  
この頃、田中善之助に春陽会への入会を勧められるが、画風が違うため不出品。

一九三〇年  
(昭和五)  
関西美術会展に滞欧中の模写を特別陳列。左京区鹿ヶ谷桜谷町の元津田青楓のアトリエに転居。大多喜二郎

の勧めで第一一回帝展に《発掘》を出品するが、落選。京都帝国大学美学会において「芸術における自然再現」と題して発表する。

一九三二年  
(昭和六)  
長男寛誕生。

一九三三年  
(昭和七)  
京都帝国大学文学部講師となり、「ギリシャ彫刻史」を講義(一九三四)。兄の同窓生神坂松濤の紹介と勧めにより、銀座・資生堂ギャラリーにおいて初個展、三七点を出品、向井潤吉らが手伝う。

一九三三年  
(昭和八)  
独立美術京都研究所開所に伴い、里見勝蔵らの紹介により学術面の指導に当たる。大阪・美術新論社画廊で個展、以後しばしば開催。この頃から日本各地への写生旅行が始まる。

一九三四年  
(昭和九)  
小林和作とともに独立美術協会会員に推され、一点を出品。また、この年会員となった田中佐一郎とともに独立美術京都研究所での実技指導に当たる(一九四四)。大札記念京都美術館展に《早春》を出品。同館および銀座・日動画廊で個展を開き七十二点を出品。

一九三六年  
(昭和一一)  
京都帝国大学文学部講師となり「パロッコ絵画」を講義(一九三七)。京都帝国大学美術部が創設され、太田喜二郎とともに顧問となる(部長

は川村多実二、部員に河北倫明、白石博三、田辺彦太郎らがいた。

一九三九年  
(昭和一二)

左京区南禅寺草川町に転居。

一九四二年  
(昭和一七)

満州国美術展の審査員となり福田平八郎らと渡満し、中国北部、東北部を旅行。

一九四三年  
(昭和一八)

日本美術報国会、日本美術及工芸統制協会が創立、両会に入会する。第六回文展の審査員を務める。

一九四四年  
(昭和一九)

独立美術京都研究所閉鎖。

一九四五年  
(昭和二〇)

激しい下痢に悩み片山津温泉で静養。大札記念京都美術館の評議員となる。

一九四六年  
(昭和二一)

大阪市主催新日本美術展の審査員を務める。京都美術懇話会が発会し会員となる。京都帝国大学工学部講師となり、絵画実習を担当(一九五二)。菊花女子専門学校が開校し、教授として絵画実習を担当(一九四八)。以後、多くの大学で絵画実習を担当する。岐阜県展の審査員を務める。以後、多くの県市展の審査員を務める。大阪市立美術館附設大阪美術研究所で実習指導に当たる。日展審査員に推されるが、独立美術協会が不参加のため辞退。美術上の諸問題を討議するとともに、展覧会も開催することを目的とした転石会

が設立され、会員となる。

一九四七年  
(昭和二二)

日展委員への就任要請を受けるが、辞退。日本芸術院会員に推挙される。独立美術京都研究所が再開し、実技指導に当たる。

一九四九年  
(昭和二四)

安井曾太郎らと御進講に当たる。京都大学文学部講師となり、「ルネッサンスからバロックへ」のテーマで講義する(一九五〇)。日西文化協会発会に際し理事となる。美術史学会創立にあたり会員となる。日本美術家連盟の発足に参加する。京都市立美術専門学校客員教授となる。美学会が創立され、会員となる。

一九五〇年  
(昭和二五)

日本美術家連盟に関西支部が設けられ、支部長となる。京都市立美術大学が開学し、同大学教授、京都市立美術専門学校教授となる(一九五二)。また、京都工芸繊維大学工学部及び奈良学芸大学の講師となる(一九五八)。平凡社発行の『世界美術全集』編集委員の一人となる。日伊協会再開にあたり評議員となる。

一九五一年  
(昭和二六)

京都大宮御所で福田平八郎と御進講、「京都と西洋画」を担当。

一九五二年  
(昭和二七)

京都学芸大学講師となり、絵画実習を担当(一九五六)。京都国立博物館評議員となる(一九六〇)。

京都市動物園の標識画を描く。

一九五六年  
(昭和三一)

ヴェニス・ビエンナーレ展に一二点出品。京都市立美術大学学長代理となる(一九五七)。

一九五七年  
(昭和三二)

大量の吐血をし、以後自宅で療養する。神奈川県立近代美術館で「北川民次・須田国太郎二人展」が開かれ、渡欧作を含む八三点が展示される。一旦快癒したが、再度吐血し、京都大学付属病院に入院。肝硬変と診断され、以後四年間入院生活を続ける。この間、特製の画架を作り、デッサンや油絵を描く。

一九五九年  
(昭和三四)

第一〇回毎日美術賞受賞。このころから画廊や百貨店、美術館などで回顧展が続く。

一九六〇年  
(昭和三五)

京都市立美術大学教授を退き、同大学名誉教授の称号を受ける。

一九六一年  
(昭和三六)

二月一六日、肝性昏睡のため京都大学付属病院で死去(七〇歳)。

一九六二年  
(昭和三七)

故人の遺志により、独立展と京展に須田賞が設けられる。

一九六三年  
(昭和三八)

京都市美術館と東京の国立近代美術館において「須田国太郎遺作展」が開催され、油絵一二三点、模写一二点が展示される。